
森の中であなたを待ってる

モギイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森の中であなたを待つてる

【著者名】

モギイ

【あらすじ】

おばあちゃんの家に行く途中、うっかり寄り道をした赤頭巾はとても綺麗な男の人にお会いました。自サイトに掲載した作品を転載しています。異種間恋愛の苦手な方はご遠慮ください。

その1

幼い頃、みんなは私のことをリーザって呼んでいた。でも六歳の誕生日、おばあちゃんが私の頭に真っ赤な手縫いの頭巾をかぶせて言つたんだ。お前は赤頭巾。私のかわいい赤頭巾つて。

* * * * *

* * * * *

大きな大きな森のはずれ、村から森へと続く細い一本道のほとりに、私の家は建つていた。道は細いながらも、小さな石板で隙間なく舗装されている。誰がこの道を作ったのか、誰も知らない。遠い昔、最初の王様がこの土地にやつて来る前から、この道はここにあつた。

小さな私は、家から森までの短い距離を行ったり来たりした。不ぞろいな石板は不思議な模様を描き、甲高い声で私に歌いかけてくるのだった。

ついておいで、赤頭巾。決して私から離れてはいけないよ。

お母さんもおばあちゃんも、口をすっぱくして同じ事を言う。森に入つたらこの道から離れてはいけないよ。森の中には危険がいっぱいなのだから。

一人でいる時には、森の入り口まで来るとすぐに引き返した。森の中へ入るのが許されるのは週に一度、お母さんに連れられておばあちゃんの家に遊びに行く時だけだ。おばあちゃんの小屋は森の奥深くにある。そして、その道は小屋の前庭まで続いていたのだ。

森には昔から、人に悪さをする魔物が住むと言われていた。途方もない大きさの狼を見た、という村人もいる。それでも幼い私にとって、森は心躍る場所だった。繰り返し通っている道なのに、毎回、見覚えのない場所を歩いている感覚に襲われる。この石畳の小道が案内してくれなければ、きっとすぐに迷ってしまったことだろう。

道は頻繁にその向きを変え、角を曲がるたびにいつも新しい景色が現れた。透き通ったせせらぎ、鮮やかな石に彩られた洞窟の入り口。思わず足を止めるたびに、母は私に声をかけた。「どんなに綺麗な物を見ても、道を離れては駄目よ。この道はあなたを守ってくれているの。道をはずしたら、一度とつちには戻って来られなくなるわ」

お母さんはお使いに行くたびにとても疲れるようだつた。私が八歳になつた頃には、お母さんはすっかり老け込み、森に入った翌日は寝床から起き上がれなくなつていて。見かねたおばあちゃんは、ついにお母さんに言つた。「メイや。お前にはもう無理だ。これからは赤頭巾一人に来させなさい」

お母さんは反対したけれど、おばあちゃんの言いつけは絶対だ。次の週からは私が一人でおばあちゃんの小屋まで通うことになつた。

* * * * *

その日も赤い頭巾をすっぽりとかぶり、大きな籠を抱えると、私は外に出た。私一人では大きな荷物は運べなかつたので、お使いは週に一回だ。

私たち以外には、おばあちゃんに会いに行く人はいなかつた。村の人たちがおばあちゃんの話をするのを聞いたこともない。森から出て来ないから忘れられてるのかな？ それとも偏屈だから嫌われてるのかもしない。子供の目から見ても変わり者だつたけど、私はおばあちゃんが大好きだつた。

ひとつだけ気に入らぬのがこの赤い頭巾。おばあちゃんの言い付けで、出かけるときには必ずかぶらなくてはならない。そのお陰で、村中の人私が私のことを赤頭巾と呼ぶ。私にはちゃんと名前があるのに。

石畳を歩きながら、私は何度も籠を持つ手を変えた。ぶどう酒の瓶がずつしりと重い。初夏だと言うのに森の天蓋の下はひんやりしていたが、それでも額に汗が滲んでくる。私は道の真ん中に腰をおろし、水筒の水を飲んだ。後どのぐらいかかるんだろう。朝ごはんを食べてから家を出て、いつも小屋に着くのはお昼前だ。私は上を見上げ、木々の隙間から太陽を探した。その日はなんとなく、いつもよりも早く歩けた気がしていたのだ。

水筒を籠に戻し、立ち上がるうとしたその時、どこかから甘い匂いがふんわりと漂つて来た。木々の間に田を凝らすと、小さな空き地に真っ白い花がびっしりと咲き乱れている。見覚えのない花だ。暗い森の中、そのあたりだけがぼんやりと白く浮かびあがつて見える。

私は何も考えずに道から足を踏み出し、花畑に向かつて歩き出した。おばあちゃんにお花を摘んでいてあげようと思つたのだ。あれだけ繰り返し注意されてきたというのに、お母さんの言葉なんてすっかり頭から抜け落ちていた。

花畠の真ん中に座り込み、私は夢中で花を摘んだ。白くて柔らかい五枚の花びらの中心からは長い金色のしべが突き出している。大輪の花には不釣合いな細い茎は、私の小さな手でも簡単に折ることができた。立ち上る強い香りに頭がくらくらする。摘み取った花を籠にいれようと振り返つたとき、誰かが後ろに立つて、肩越しに覗き込んでいたのに気付いた。

それはとても背の高い男の人だった。

驚いた私は手に持っていた花を全部落としてしまった。森でよその人には出会った事なんて一度もない。おかあさんは『『じろつき』には気をつけるようにと言つてたけど、この人がその『『じろつき』なんだろうか。

「こんなにちは。驚かせてしましましたか？」

明るい笑顔で男が尋ねた。豊かな金色の髪が、木漏れ日を受けて柔らかな光を放っている。彼の服は、周りに咲いてる花みたいに上から下まで真っ白だ。裾と襟には金の糸で細かな刺繡が施されている。まるで王様のお城の人みたい。『『じろつき』』というのもっと汚い人のことだと思っていたので、私は思わず尋ね返した。

「あなたは『『じろつき』』？」

「いいえ、『『じろつき』』ではありません。私の名はシグといいます。あなたは赤頭巾ですね」

「みんなそう呼ぶけど、本当はリーザっていうの」

「かわいいお名前ですね」

シグは微笑んだ。

「こつもの道を通りて、おばあ様の小屋を訪ねていらしく……」

「知ってるの？」

「ええ。でも森の中で女の子に近づくと、怪しまれてしまいそうだ
すからね。今まで話しかけずにいたんです」

「そんなことないわ

「わざわざ『さういふのか』だつて言わされましたよ」

愉快そうにシグが笑う。

「いめんなさい」

私は慌てて謝った。この人は悪い人間には見えない。

「おばあ様のところへ行くのでしょうへ 遅くなるといけません。
歩きながら話しましょう」

そうだ、時間のことをするかり忘れていた。おばあちゃんが怒る
とともに怖いんだ。私は慌てて立ち上がった。

「あれ、道がない

道があつたはずの場所を振り返って、私は叫んだ。いくら細い道
だからって、あんな近くにあったんだ。見失うはずなんてないのに。

シグが蔑むように鼻を鳴らした。

「あの道は信用なりませんからね。あなたが見ていない隙に、さつさと隠れてしまつたんでしょう。心配いりません。私が案内しますよ」

そう言つと彼は私の落とした花を籠に納め、先に立つて歩き始めた。私も後について歩き出す。足を踏み出すたび、黄緑色の絨毯みたいな下生えに靴が沈み込んだ。石板の上よりもずっと歩きやすい。「道から離れてもいいの？　おばあちゃんはあの道が私を守ってくれると言つてたわ」

「この森には昔から様々な生き物が住んでいます。中には人間を憎む者もいるんです。そんな者たちから身を守るために、古の人はあの道をつくつたのでしょうか？」

人間を憎む者たち。ふと、村の人たちが狼の話をしていたのを思い出した。

「怖いわ」

「私がいれば大丈夫ですよ。あなたを守つて差し上げます」

「あなたは強いのね」

「ええ、とても強いですよ」

「狼よりも？」

「ええ、狼よりも強いです」

シグは私の不安そうな顔を見て、力づけるように微笑んだ。

「そんな危ないとこに一人で住んで、おばあちゃんは大丈夫なのかしら？」

「おばあ様は別ですよ。の方がこの森も村も、王様の住む都でさえ守つているんですから」

「おばあちゃんが？」

「の方は大いなる力を持つた魔女なのです。彼女が巡らせたまじないのお陰で、邪悪な者たちはこの国に足を踏み入れることすらできません」

「でも村の人達はおばあちゃんが嫌いだわ。誰も訪ねてはいかないもの」

「そんなことはありませんよ。誰もがおばあ様に感謝しています。王様ですら彼女には敬意を払っているのですよ。の方の魔法が強すぎて、誰にも近寄れないだけなのです。血の繋がりの強い、孫のあなた以外はね」

私を見つめるシグの目が、きらりと光った気がした。彼は私の知らないことをたくさん知っているようだ。どうしてこんな立派な身なりをした大人が、私みたいな小さな子供に話しかけてきたのだろう。気になつたが、彼の話に聞き入っているうちに、そんな疑問はどこかへ消えてしまっていた。

お口様が頭上に差し掛かる頃、おばあちゃんの小屋が見えてきた。ひとり大きなブナの木々にぐるりと周りを囲まれた小さな丸太小屋だ。苔むした屋根に乗つかつた小さな煙突からは、料理の煙が細々と立ち上っている。手前にはさつき見失つた小道が見えた。

「さすがにここまで来ると、いたずら者の道も隠れてはいられないようですね。さあ、道に戻つてください。あの道の上を歩かなければ、何者も小屋には近づくことができないんです」

私が小道の上に立つと、シグは私に微笑みかけた。

「私はここから先へは行けません。三日後に今日と同じ場所でまた会いましょう」

シグは私の使いの日も知っているようだ。私には、あの花畠をもう一度見つける自信がなかつた。何年も通つていて、今日まで気づかなかつたぐらいなのに。

「お花畠、見つかるかしら」

「ひねくれた道も、必ずあの辺りを通らなければならないのですよ。花の香りを目印にすれば必ず見つかります。さあ、おばあ様が心配しないうちに早く行って下さい」

私はシグに別れを告げると、おばあちゃんの小屋に向かつて歩きだした。ブナの木を通り過ぎて後ろを振り返つたけれど、彼の姿はもうどこにも見えなかつた。

その2

それからというもの、私が森に入るたびにシグは花畠で待つってくれた。すっかり彼が気に入った私は、おばあちゃんの言いつけを破り小道を使うのをやめてしまった。彼と歩けば、森はもう危険で見知らぬ場所だとは思えなかつたのだ。

おばあちゃんの小屋へ向かう途中、シグは私をいろいろな場所へと案内してくれた。どこまでも透き通つた深い泉や、リス達の住む古木、奇妙な形をした岩が並んでいる空き地、森の木々の間にはほかにもたくさんの花畠が隠されていた。以前小道から見た光景を話せば、シグは迷わずそこへと私を導いてくれた。

私たちはいつも木々の下を並んで歩き、シグは礼儀正しく私の話に耳を傾けた。彼が語つてくれるのは遠い昔に起こつた出来事や、この森の話ばかり。彼自身の事は一切話さない。だからと言って話が尽きる事はなかつた。自分の目で見てきたかのように話す様子に、彼はとんでもない嘘つきか、とんでもない年寄りのどちらかに違ひない、と私は思つた。

村での暮らしさ退屈だ。村の人達は私に優しかつたけれど自分の子供とつき合わせようとはしなかつたので、私はいつも一人だつた。この赤い頭巾をかぶるようになつてからはなおさらだ。

シグとの森の散歩は私にとつての唯一の楽しみだつた。そしてそれは十年後のある春の日まで続いた。

* * * * *

* * * * *

その日はいつもよりも森に入るのが遅くなつた。一旦、村まで出でておばあちゃんの薬を貰つてこなければならなかつたのだ。近頃おばあちゃんは胸が苦しいと言つてよく横になつっていた。本人は大した事はないと言い張るのだが、週に一回では心配なので、私はほぼ二日置きに様子を見に通つていた。

薬屋の主人はおばあちゃんの様子を詳しく聞きたがつた。どれが一番効くかわからぬからと薬を三種類も出してくれたのに、お金は請求しない。村人は魔女に感謝しているのだとシグは言つていたけれど、どうやらそれは本当らしい。

薬を受け取ると私は早足で引き返し、一度家に戻つて髪を整えた。私のくすんだ茶色の髪は、シグの見事な金髪に比べると全く見栄えがしない。それでも私は丁寧に櫛を通した。どうせ馬鹿げた頭巾の下に隠れてしまつただけど、彼に会うときはきちんとしていたかつたのだ。

シグほど美しい人を私は見たことがなかつた。彼の瞳は森の木々を映したかのような緑色、金細工みたいなまつげで縁取られている。肌は白くなめらかで、街で見た磁器の人形みたいだ。こんなに綺麗な人だつたなんて、小さい頃にはちつとも気づかなかつたのに。おばあちゃんには申し訳ないけれど、シグと会つ機会が増えて私は内心つきつきしていた。

出会いから十年も経つのに、彼はまったく変わつていない。服装もあの時まま、雨の森を歩いても濡れもしなかつた。さすがに今では彼が人間ではないのに気付いていた。森の奥に住むという妖精の類なのだろう。もしかしたら、あの花畠に宿る精なのかも知れない。私は彼に尋ねようとはしなかつた。そんなことをしたら今の

彼との関係が壊れてしまつかもしれない。そう思つと怖かったのだ。

その日もシグは花畠で待つていた。初めて出会つた日のように空は晴れ渡り、空気はほんのりと暖かい。今が盛りの純白の花々は、金の花粉をそよ風に散らしている。いつものように満面の笑みを浮かべて彼は私を迎えた。

「遅かつたですね。赤頭巾」

責めるでもなく彼が言った。彼はいつも私を赤頭巾と呼ぶ。何度も私が頼んでも、名前で呼んでくれようとはしない。

「『めんなさい。薬屋に寄つてきたの』

彼は手を伸ばすと私の手から籠を受け取つた。いつも荷物を運んでくれるのに、決して私に触れる事はない。木漏れ日の中を通り抜けるたびに彼の姿は揺らいで見えた。触れても実体などないのかもしれない。

その日のシグはずいぶんと無口だった。時々黙つたまま私の顔に目をやる。訳を聞いてはいけないような気がして何も話さず歩いていくうちに、おばあちゃんの小屋が見えるところまで来てしまつた。普段ならシグはここで引き返すのだが、その日はなかなか立ち去ろうとしない。

「どうかしたの？」

どうどう我慢ができなくなつて私は彼に尋ねた。見上げた彼の体の向こうに、一瞬背後の木々が透けて見えた気がして私は目を凝らした。何かがひどく間違つているのにそれが何なのかわからない。

突然込み上げてきた得体の知れない不安に私は身震いした。

「赤頭巾、お願いがあります。もう時間がないのです」

今までにない真剣な面持ちでシグが私に向き直った。

「その頭巾をはずしてはもうできませんか」

「だめよ。おばあちゃんに叱られるわ」

「の方は気付かれません。お願いです」

「でも……どうしてなの？」

「それが邪魔をして、私はあなたに触れる事ができません」

「シグは私に触れたいの？」

心臓がドクンと鳴った。

「ええ、あなたは美しい。一度いいからあなたに触れてみたいのです。いけませんか？」

美しい？ 私が？ シグの口からそんな言葉を聞くとは思つても
いなかつた私には、ぽかんと彼の顔を見つめ返すことしかできなか
つた。拒絶されたと思ったのだろう。彼の目に浮かんだ落胆の色に、
私は慌てて頭巾を脱ぎ捨てた。

「ありがとうございます」

瞳を輝かせ、シグはまず礼を言つた。どんな時でも彼はおかしなぐらい礼儀正しいのだ。彼は落ちている頭巾に触れないよう私に近づくと、私の頬にそつと右手を押し当てた。初めて触れる彼の手のひらは暖かく、わずかに震えている。ふふ、と声を立てて彼が笑つた。

「どうしたの？」

「柔らかいのですね」

彼の手が熱い。いや、熱を持っているのは私の顔の方だ。恥ずかしくなつて身を引こうとした私の肩を彼の腕が捕らえ、そのまま自分の胸へと抱き寄せた。

彼の大きな身体に包まれて、私の心臓は爆発しそうだつた。背の低い私の頭はシグの胸の辺りまでしか届かない。見た目よりも厚い胸板を通して彼の速い鼓動が響いてくる。震える声で私は尋ねた。

「時間がないつてどういうことなの？」

私を抱くシグの腕に力がこもつた。

「魔法が弱くなっているのです。このままではもうこの姿を保つことができなくなってしまいます」

「シグは消えてしまつの？」

「いいえ、でもあなたはもう私に会いたいと思わないかもしません」

「どうして？」

彼はその質問には答えず、いきなり私に口付けた。間近に迫る彼の瞳の奥に吸い込まれそうな気がして、私はぎゅっと目を閉じた。ただ唇を押し付けられているだけだというのに、全身の力が抜け膝ががくがくと震える。ぐずおれかけた私の体をシグの力強い腕が支えてくれた。

ようやく彼の唇が離れ、私は目を開いた。シグは少し照れたように、それでも目をそらさずに私を見つめている。ほんやりと霞のかかった頭で、私は一度も尋ねなかつた質問をした。

「あなたはなんなの？」

シグはそれにも答えず、悲しげな口調でいつ言つただけだった。

「これだけは覚えていてください。赤頭巾、私はあなたを愛します」

そのとき後ろから大きな怒鳴り声がした。

「お前、何をしてるんだい！」

小屋の前におばあちゃんが立っていた。ブナの木の間を抜けて、すんすんこちらに向かってくる。お日様はとっくに頭上を通り過ぎていた。いつもより遅い私を心配して様子を見に出てきたのだろう。

シグは雷にでも打たれたかのように飛び上がり、くるりと向きを変えると一歩散に走り出した。まるで肉屋の主人に見つかった泥棒猫のようだ。

「おばあちゃんは彼の背中に向かって容赦なく怒鳴りつけた。

「あたしの孫に近づく気にならない。どうせやること、考えてやしないんだろ?」

私は驚いておばあちゃんに駆け寄った。

「おばあちゃん、やめ! シグは何も悪い事していないよ

「こいつからあいつに付き纏われてるんだい?」

「最初に森に来るよくなつてすぐ……」

「なんだって? どうして黙つてた

「どうしてだるいへ、きっと私は知つてたんだ。もし話せば、おあばちゃんはいい顔をしないって。

「あっこつに触られたのか?」

「少しだけよ。さつきが初めて」

おばあちゃんは厳しい顔で私の目を覗き込んだが、私が嘘をつけいないのがわかったのかすぐに表情を和らげた。

「いいかい、あっこあつむじ、おじさんじかなによ

私にそつぜんと、おばあちゃんの話題はもつれたかのように別の話を始めた。そして悲しことに、その日からシグはおじさんじかなによ

つたりと姿を現さなくなつたのだ。

* * * * *

* * * * *

それからしばらぐ経つたある日、おばあちゃんが言つた。

「お前、あたしに腹を立ててるんだもん」

「どうしてやつての？」

「シグの」とか。お前に会いに来なくなつたからね」

「腹なんて立てないわ」

腹を立ててはいなかつた。それは本當だ。おばあちゃんのする事にはみんな理由がある。ただ……ひどくがっかりしていただけだ。

「あいつが気になるのかい」

「少しね」

「ふうん。お前も年頃だからね。あんな綺麗な男は街まで行つたつていやしないんだもん」

図星を指され赤くなつた私を見ておばあちゃんは笑つた。

「あいつは駄目だよ。男はね、見かけじゃないんだよ。このあたしは騙されやしないわ」

シグが現れなくなつても、私は小道を使わずにおばあちゃんの小屋まで通つた。森のこちら側は、今では私の庭みたいなものだ。『人間を憎む者たち』は赤い頭巾をかぶつた私に危害を加えることはできない。狼より強いシグでさえ私に触れられなかつたぐらいなのだから。

それに、どこかでまたシグに会えるんじゃないかなつて期待していたのもある。あの道を歩けば彼は私に近づけない。今の私にはそれがよく分かつていた。

あの事件から半年が過ぎた。森の中はすっかり秋めいて、分厚く積もった落ち葉の上をリスや鳥達が忙しく飛び回っている。シグは相変わらず姿を見せようしない。私は彼に会つのを半ば諦めかけていた。

その日も私は大きな籠を抱え、おばあちゃんの小屋の扉を開けた。最近はおばあちゃんは昼間も眠っている事が多い。起こさぬように忍び足で中に入り、そつと棚に籠を載せる。頭巾を脱いで薬のびんを取り出すと、まっすぐにおばあちゃんの寝ている寝台に向かった。

「おばあちゃん」

寝台の上の毛布のふくらみに向かって私は声をかけた。

枕の上に見えるおばあちゃんの頭が黒っぽく見えて、おや、と首を傾げる。おばあちゃんは白髪だったはずなのに。覗き込もうとした瞬間、毛布が勢いよく跳ね上がり、巨大な獣が姿を現した。

狼だ！

私は叫び声をあげ、扉へ駆け寄ったが、狼は私の頭上を軽々と飛び越え、扉の前に着地した。ぐるりと向きを変えると、私に向かって獰猛なうなり声を上げる。

退路を絶たれた私は、慌てて駆け戻ると、寝台によじ登った。子牛ほどの大きさがある真っ黒い狼。村人達の話に出てきたのはこの

狼にちがいない。漆黒の毛を逆立て、歯茎を剥き出しにしてつなりながら、狼は寝台の前を行ったり来たりしている。噛み殺そうと思えば簡単なはずなのに、猫がネズミをもてあそぶように、私をなぶつて楽しんでるんだ。

「おばあちゃんはどうしたんだ？」食べられかけたの？

その時、足元から押し殺されたような声が聞こえてきた。おばあちゃんだ、おばあちゃんが私を呼んでいる。

「エリスルの？」

「寝台の下や。ここが突然飛び込んできてね、危うく食われちまうといふだつたよ」

苦しそうにおばあちゃんが答えた。

「セイなら狼も入れないのね。私もセイに隠れるわ」

「駄目だよ。そこから田舎者じみやままで。背中を向けたらやられちまつよ」

「だって、エリスルたら食べられちゃうよ」

私は狼の剥き出しになつた白い牙を見つめて身體にした。

「いいかい、お前は私の孫だ。強い魔法の持ち主なんだよ。そんな狼を追い払うぐら朝飯前ぞ」

「じゃあ、エリスルおばあちゃんが魔法を使わないの？」

「病のせいであたしの力はもう使い物にならないんだ。こゝして息をしてるのが精一杯だよ」

狼は相変わらずなり声を上げながら、部屋の中をぐるぐる歩き回っている。

「でもどうやるの？ 私、魔法なんて使えない」

「息を深く吸つて」らん。身体の中心に力を集めるんだよ

「力って何？」

「いいからやつて」らん

私は狼から目を離さないようにしながら、おばあちゃんに言われたとおり息を吸い込んだ。でも、何も起こらない。狼が動きを止めた。そろそろ私を仕留めることにしたらしい。跳躍しようと身体を低く床に沈める。

シグ、シグ、助けて。

私は心中でシグを呼んだ。狼より強いシグ。私を守ってくれると言ったシグ。大好きなシグ。もう一度シグに会いたい。こんな所で獣に殺されるわけにはいかない。彼に会えるまで私は死ねない。

そう思つたとき、身のうちに不思議な感覚が湧き起つてきた。手足の先から暖かいものが注ぎ込まれてくるのだ。これがおばあちゃんの言つてる力なのだろうか。私は部屋の中を見回し、あの白い花の花粉のように輝く金の光が、小屋の壁を突き抜けて私へと集ま

つてくるのに気付いた。森の奥の方角から、川のように流れ込み、木の根に吸収される水のように手足を伝って私の身体へと入り込んでくる。

世界がこんなにきらきらと力で溢れていたなんて、今までちっとも気付かなかつた。

急に気が大きくなつた私は、狼に向かつて叫んだ。

「下がりなさい…」

私自身が驚くほどの迫力に満ちた声に、狼は慌てて飛びずさつた。寝台の下のおばあちゃんが励ますように声をかける。

「つまいまんのだよ。力が集まってきたようだね。さあ、その力を思い切り、そこのケダモノにぶつけておやじ」

「どうしたらいいの？」

「あいつの中に悪しき心を感じるだろ？ それを田掛けて思い切り投げつけてやればいいのさ」

小娘に驚かされたのが悔しかつたのか、狼は怒りのこもつた唸り声を上げて私を睨んでいる。再び、飛び掛ろうと身構えるのを見て、私は慌てた。

「駄目、何も感じないわ」

「田をつぶつてじりん。そのまづがよく見える」

今にも襲い掛かるうとしている狼を前に目をつぶるのは怖かったけれど、私はおばあちゃんの言葉を信じぎゅっと目を閉じた。不思議なことに、目を閉じても部屋中になふれる金色の光は消えない。私のすぐ目の前にいる狼の存在もはつきりと感じられた。木々が空へと枝を伸ばすように、土の中に根を張るように、私の感覚は広がり、狼の中へと入り込んでいく。

そして、私はそこを探していたものを見つけた。

私が再び目を開くと同時に、狼が跳んだ。巨大な身体が私の前に着地する。寝台が大きく揺れ、おばあちゃんが悲鳴をあげた。

「赤頭巾！ どうしたんだい？」

狼は私に躍りかかり、私は両手を大きく広げて狼の身体を受け止めた。そして、狼の鮮やかな緑の瞳に向かい私は言った。

「こたにちは、シグ」

「こたにちは。赤頭巾」

長い舌で自分の鼻の頭をペロリと舐めると、狼は礼儀正しく挨拶を返した。喉の奥から絞り出されるような低い声は、私の知っているシグの澄んだ声とは似ても似つかない。それでもこの狼は確かにシグだった。

おばあちゃんがけたたましい声で笑いながら、寝台の下から這い出しへ来た。ばたばたに乱れた白髪はほほつだりけだ。

「たいしたもんだね。」この正体を見抜くと、さすがあたしの孫だよ

しわだらけの顔をわらいくしゃくしゃにして、おばあちゃんは得意そうだ。狼に食べられずに済んだ私は、安堵のあまり寝台の上にぺたんと座り込んだ。急に腹が立つてきてシグの顔を睨み付ける。

「ひどいじゃない。食べられちゃうかと思つたわ。どうしてあんなことをしたの？」

「すみませんでした。あなたのおばあ様の言つたかったのです」

シグは申し訳なさそうに大きな耳をぺたりと後ろに倒した。そんな事だらうとは思つたけど。私は問いかけるよつておばあちゃんの顔を見た。

「こいつがね、お前に会いたくて仕方がないこと泣き付いてくるから、試してやつたのさ。もしお前がこいつの正体に気付くようなら、お前たちの仲を許してやるってね」

私は目を瞑るべくした。

「仲を許す？」

「お前だつてまんざらでもないんだらう？　あんた達の間にはたしかに絆が見える。あたしは何も言わないことにしたよ」

おばあちゃんの言葉に、狼は上田遣いで私を見上げた。恥ずかしそうだ。

「でも、狼の姿をしているわ。おばあちゃんが意地悪をして変えてしまったの？」

「おや、お前には分からぬのかい？ これがこの子の本当の姿なんだよ」

そんな……。

私はシグに話しかけた。

「シグ、そななの？」

「やうです。あなたを怖がらせなによつて人の姿をしていました」

私を花畠で待つていてくれたシグは、肌も服も真つ白で髪の毛はお口様みたいにきらきらしてたのに……。この狼は鼻の頭から尻尾の先まで、見事なまでに真っ黒だ。口悪いを隠せず私は言った。

「全然違つたのね」

「醜い狼の姿だと、あなたに嫌われてしまつと思つたのです」

「それにしちゃあ、ずいぶんと見栄をはつたもんだね。あの姿じや惚れるなつて言つまづが無理さ」

おばあちゃんの嘲るよつた口調に、狼は気まずそつて自分の足

元を見た。

「ねえ、おばあちゃんがいって言つたら、シグはまた人に戻れるのね」

「それが……」

言い淀んだシグに私は不安になつた。

「もしかして、ずっとこのままなの？」

おばあちゃんがまた笑つた。

「心配はいらない。お前が少し修行を積めば、シグはまた人に戻れるよ。この子は私の力を借りて人の姿をしていたのだからね」

そこで急におばあちゃんは真顔に戻り、横目でシグを睨んだ。

「借りると言うより、勝手に拝借と言つたほうが正しいかもしねないがねえ」

シグは大きな頭を前足の間に挟みこみ、ひゅーん、と鳴いた。あれからおばあちゃんに相当絞られたのだろう。

「修行つて何のこと?」

「魔法の修行だよ。お前がうまく力を使えるようになれば、シグもお前の力を借りられるようになるだろう? お前は私の後を継ぐのにふさわしいだけの力を持つている。見ての通り、私は病に侵されているからね、魔法は弱くなる一方だ。そろそろお前には、跡継ぎ

としての修行を始めてもらわなくてはね

「おばあちゃんは、私に魔女になれって言ひの？」

「嫌なのかい？ お前だつてこの歳になれば、働きに出なくちゃならないよ。街でお針子でもして、金持ちの男に嫁ぐつもりなのかい」

私はシグの顔を見た。まん丸な一つの瞳が、不安の色を浮かべてこちらを見返している。

「私が魔女になればシグは人の姿に戻れるのね」

「ああそうだ」

「それならやるしかないわね。どんなお金持ちの男よりも、シグのほうがずっと素敵だもの」

シグの尻尾がぱたぱたと動いた。狼も尻尾を振るなんて知らなかつた。

* * * * *

突然、おばあちゃんが窓の方を見た。

「来るよ。五人だ」

シグが勢いよく跳ね起きると背中の毛を逆立てる。喉の奥から低

「どうしたの？ 誰が来るの？」

「この森を狙つてる奴らがいるんだよ。あたしの力が弱つたからまじないも弱くなつた。もう何もかも締め出してはおくのは無理なさ。その隙を突かれたね」

シグが悔しそうにうなる。

「すみません。私が見張つていなければならなかつたのに」

「シグが？」

「まじないを幾重に重ねても、どうしても隙間を抜けてくる奴がいる。そいつを追い払つのがシグの役目だったのさ」

「私は何百年もの間、この森に住む魔女と契約を交わしてきました。森を守る代償としてこの森で暮らすことを許されるのです」

私は首を傾げた。

「おばあちゃんのお手伝いをしていたの？ それなのにおばあちゃん、シグに冷たかったじゃないの」

「真っ黒なケダモノの分際であたしのかわいい孫を狙つからせ。当たり前だろ？」

「そう言つとおばあちゃんは椅子に座り込んだ。顔が青白い。氣勢を張つて元気なフリをしてはいるが、相当弱つているのだろう。

「エリにいたら見つかっちゃうわよ」

不安そうな私にシグが提案した。

「石の洞窟まで行きましょう。あれの方があなた達を守りやすこ

「でもずっと距離があるわ」

おばあちゃんが驚いた顔で私を見る。

「どうして知ってるんだい」

私はペラッと舌を出した。

「シグに教えてもらひたの。森の中のことは何でも知ってるわ」

「だつてお前、いつも道を通つて来てたんだもん」

おばあちゃんは恐ろしげに形相でシグを睨みつけ、かわいそうなシグは惨めな様子で、尻尾を後ろ足の間に挟み込んだ。

「お前、あたしを騙してたんだね」

「すみません。どうしても赤頭巾と会いたかったのです」

シグの声は消えてなくなりそうだ。

「こくら守りでいるからと言つても、森の中は危険なんだよ。あたしを追つ出してあいつらを招きこむようつけて奴もいるんだ」

「だから私が戻ってきたのです。彼女には誰にも手を触れさせません」

おばあちゃんに怯えながらも、シグは最後の言葉だけは力強く言い放つた。

私は寝台の上の毛布をたたむと小脇に抱えた。部屋の中を見回し、必要になりそうなものをすばやく籠に収める。

「おばあちゃん。その話は後にして。早く行かないと悪い人たちが来ちゃうわ」

おばあちゃんはシグの首に腕を巻きつけ、よろよろと歩き出した。やつとの事で前庭のブナの木まで辿り着いたが、この調子ではいつになつたら田的池に着けるのかわからない。

「ねえ、シグに乗っしゃつたら？」

「やめとくれ。狼にまたがるだなんて、まるで魔女みたいじゃないか」

「だって魔女なんでしょう？」

「みんなはそう呼ぶがね。あたしには魔法らしい魔法は使えないんだよ」

私は有無を言わせぬおばあちゃんの腰を抱えると、シグの背中にこ押し上げた。

「しっかりつがまつていてください」

シグが勢いよく走り出す。おばあちゃんは悪態をつきながらシグの首にしがみついた。

「そんなに大きな声を出しては見つかりますよ」

毛布と籠を抱え、私もシグの後を追つて走り出した。異変に気付いたのか生き物達はすっかり姿を消し、森の中は静まり返っている。洞窟を目指して私達は昼下がりの森を走り抜けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4584z/>

森の中であなたを待ってる

2011年12月16日17時52分発行